



ほうおんこうの赤いお蠟燭

ほうおんこう
報恩講というのは、親鸞さまのご命日のお参り（ご法事）です。
1月16日が親鸞さまのご命日です。ご本山（本願寺）では、1月
9日から16日まで「御正忌報恩講」としてお勤めされています。
私たち浄土真宗のお寺では、すこし時期を早めて報恩講をお勤め
するところが多いようです。

ほうおんこう
報恩講といえば、赤いお蠟燭でご法事をお勤めします。私は赤
いお蠟燭が大好きです。なんだかお祝いのような感じがしてうれ
しくなります。ご命日というのは、人が亡くなった日なのに、お

祝いのように
確かに、
なたを必ず
いくださり
なもあみ
す。私た
はなくで
されて
ご命
ます。
える
うご
まで
わた
私

ほうおんこう 報恩講



本願寺

ほうおんこう 報恩講



一番かわいがってくださるのはお父さん、お母さん、そして私をしっかりと守ります。7

「報恩講」とは親鸞聖人の「法事」です。毎年お勤めをさせていただく大事な法要です。「報恩講」ですから、親鸞聖人にお礼を申しあげると言うのが、法要をお勤めする意味です。ではなぜ、われわれが800年ほど前にこの世にいられた親鸞さまにお礼を申しあげるのでしょうか。

親鸞さまは私たちに本当の阿弥陀さまのお心を教えてくださいました。それまで、阿弥陀さまは「いい人は救ってあげるが、悪い人・愚かな人はお救いくださらない」と考えられていました。しかし、親鸞さまは「阿弥陀さまは私を裁いてくような裁判官のような、試験官のような仏さまではありません。私をお救いくださる親さまです」とお示しくださいました。

あなたにとって「親」ってどんな人ですか。一番優しいですね。先生は私をしっかりと守ります。他人も私をしっかりと守ります。



「星の王子さま」という物語をご存じのかたは多いこと
でしょう。「おとなはだれも、はじめは子どもだった。(しかし、
そのことを忘れずにいるおとなはいくらもない)…」とい
う前書きで始まる、サンテグジュペリのとびきり素敵な物語
です。小学生の時プレゼントされたこの物語は、今も素敵な
です。小学生の時プレゼントされています。この物語は、小さ
な自分の星をあとにした王子さまが、砂漠で遭難したパイロ
ットに語りかけるという形で進められていきます。そのなか
で地球までやって来る間に見物した6つの星のありさまを話す
場面があります。やたらと威張っている王さま、うぬぼれや
の男、黙りこくった呑み助、お金持ちになることだけを考え
ている実業家、街灯の灯りをつけるのに忙しい点灯夫、自分
の星のことを知らない地理学者、それぞれ大変特徴ある人々
が紹介されるのです。

いつのころからでしょうか。それらの星に住んでいる人々



と、自分
私がつ
つの星
める、
一番自
ろに
がひ
し
し
つ

ぼうおんこう





父親、二度死ぬ！



えっ？どうということ…？



一度目は人生を終えたとき、二度目はご縁の結びとに忘れられたとき。



そっかー。みんな親類さまを忘れていないから、今もご法事（報恩講）がお勤めされているんだね。



そうだよ。「阿弥陀さま、親類さま、いつもご一緒にくださり、ありがとうございます」と、お礼を言うんだよ。

幼いとき、ご両親と別れた親類さまは、仏さまに会おう、少しでも近づこうと、20年間比叡山で学問・修行に励まれました。しかし思いはかなわず、悩み・苦しんだ結果、法然聖人の所へ行きました。

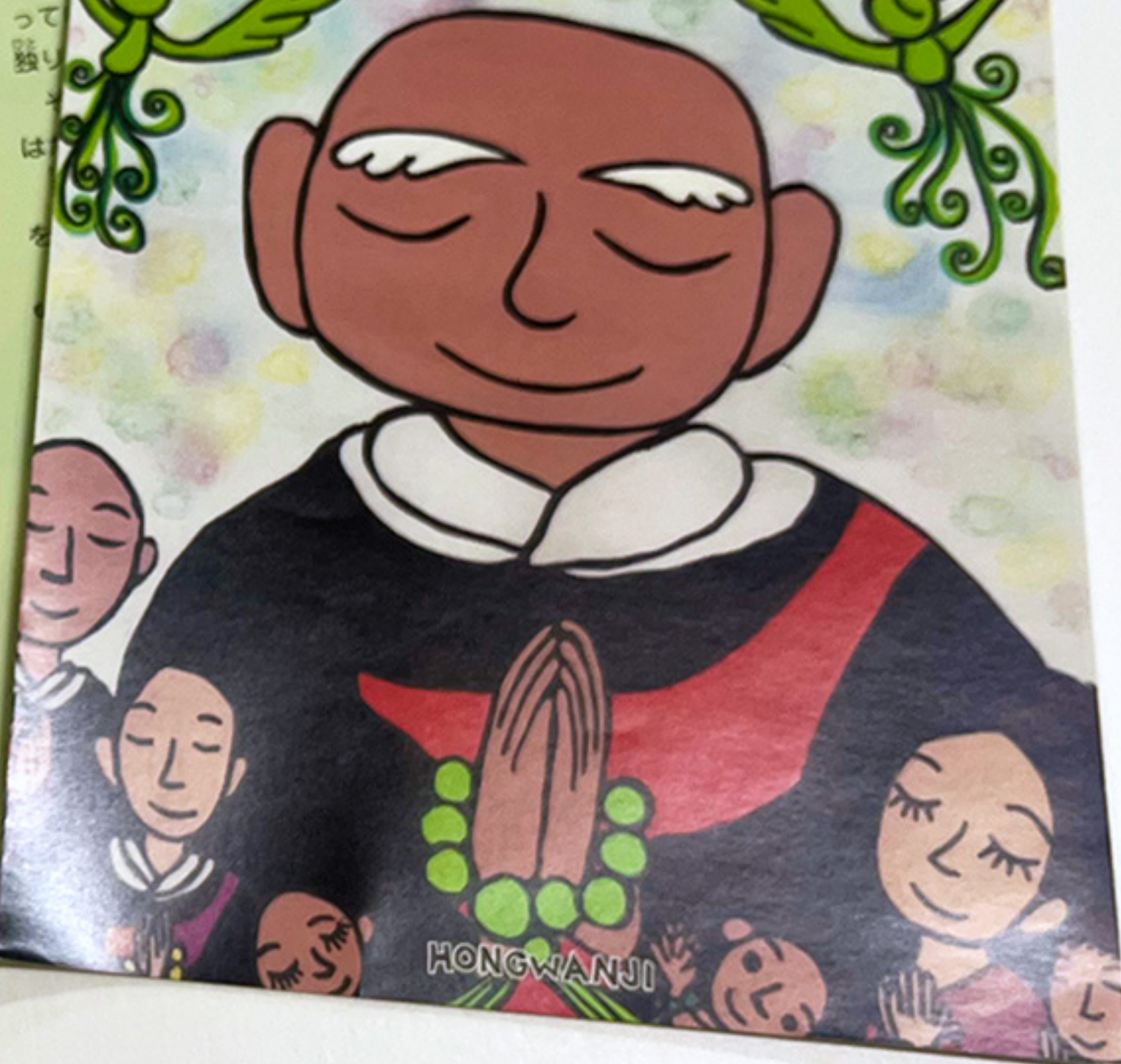
「20年…大変でしたね。でも阿弥陀さまは、あなたが思うより先に、遠いに来てくださっているのですよ」

「あなたが仏さまのことを思っている、そうでなくても、いつでも・どこでも・どんな時でも、必ずご一緒にくださるから、阿弥陀さまなのですよ」

法然聖人のこのお言葉を大切にして、阿弥陀さまと一緒に90年のご生涯を生き抜かれたのが親類さまです。

「南無
「ここ
という
置に
きな
「あ
って
独り
は
を

ほうおんこう



HONGWANJI